

博多大空襲

福岡市博多区 林 文彦

医局で昼食をとりながらテレビを見ていたら、昔懐かしいB29の英姿があらわれ、明日は博多大空襲の日とある。一緒に食事している若い女医さん達は勿論のこと、あまり若くない先生達に話かけても全然通じが悪い。戦争は遠くになりけり。戦後も50周年になったところで、私自身のささやかな戦争体験を残しておこうと思いついた。

昭和20年6月19日、当日は蒸し暑い日であった。戦争は末期に近く、食物は極度に欠乏し、明日の命の保証も無く、毎日の生活は惨憺たる状態であったが、まだ医学部2年生、青春のただ中であつた故か、長い歳月に風化した故か、辛かつたというような記憶が沸き上がってこない。

我々のグループ（臨床実習の単位）は医学部警備隊（隊長は後の九大学長遠城寺教授）に入られていて、空襲やその他の外敵から医学部構内の施設や人間を守る役目であった。

当夜はちょうど我々グループの8人が当直の日になっていた。警備隊の当直は旧精神科病棟の前（現在の総合外来の前あたりか）にあつた木造二階建の学生集会所で、毎夜のようにある空襲警報に備えて、学生服にゲートルのままの就寝であつた。明日をも知れない身でもそこは若さ、硬軟とりまじえたお喋りをして寝につこうと思つたら、空襲警報発令であわてて飛び出した。私に課せられた仕事は、医学部事務所の屋上に造られた対空監視所に上がって、敵の機影が見える度に鐘を叩いて、「皆さん、早く逃げて下さい」と知らせることである。夜中にけたたましく響いているサイレンの音を聞きながら、真暗な中を梯子をつたわって塔屋の上の監視所にたどり着いた。（我々が重い砂嚢を担ぎ上げて造つた監視所は戦後直ぐ取り壊されたが、凄惨な重量物を運んだエレベーターは、戦後も長く20cmもずれたままであつた。）

幾条ものサーチライトが博多の上空で交錯しながら慌ただしく敵機を探りまわり、サイレンはヒステリックにわめきたてている。夜空を見上げていたら、白く輝いた美しい機影がサーチライトの光に浮かび上がった。あわててカンカンカンと鐘を叩く。と同時に博多の街の周辺からボンボンボンと高射砲の音が響きわたる。白い機影は姪の浜の方向から真直ぐに私の方に向かって来て、ちょうど私の頭上あたりでキラリと反転し、博多湾の方に向かった。綺麗だなあと見惚れていると、その瞬間、天神とおぼしきあたりにパツパツと火の粉のようなものが上がった。するとまた1機、サーチライトの中へ、反転と同時に再びまことに正確に同じような場所に火の粉が上がる。次に1機、また1機、間隔まことに正確に侵入してきて同じように反転して海の方へ。サーチライトの光芒に捉えられた機影に向かって高射砲が勢いよく叫びたてるが、爆発音とともに散る白煙はいずれもB29のはるか下の方であつて、白い魚は何事もないように悠々と泳ぎ去ってしまう。それまでは大本营発表を信じて彼我伯仲などと思ひ込んでいたので、歯痒いこと夥しい。

約30分位の間に、50～60機が来て焼夷弾を落として去った後は、みはるかす博多の街は見事に一面火の海、そこから立ち昇る紅蓮の炎は天を焦がし、サーチライトなど無くても銀の翼を赤々と写し出している。高射砲はやっつけられたのか馬鹿らしくなったのか、全くの沈黙。天井のサーカスはあちらさんの意のまま、2時間足らずの間、正確に無造作に続けられていった。

私はとっくの昔に鐘叩きなど忘れてしまって、ただ独り、博多の街中では最も高所である事務所の屋上から、茫然と戦争の凄まじさを見下ろしていた。物凄い炎の下には、芥川の『地獄変』さながらの図絵があった筈であるが、見渡す限りの真赤な火の海はただただ美しいばかりであった。

千代町から浜の方にパラパラと火の手が上がったので、遂には我が頭上かと覚悟を決めたが、長い長い時間が経過した空襲もやっと終わりとなり、全くの静寂にたちかえった。

しかし、全市まだ延々と燃え続け、岩田屋だけが鮮明に炎の中に浮かび上がり、我が博多の街も遂に全滅かとの印象であった。

当日の西部軍発表では、B29が60機来襲、市内に火災を生じたが、市民の敢闘により沈下、敵に甚大な損害を与えた…ようなことになっている。戦後、アメリカの記録を見たところでは、博多空襲に参加したのは、B29が220機、損害0機（これは私も確認している）、全く一方的な独り舞台なのである。

夜半、それまでの異常な高揚感も冷え冷えとなり、落ち込んだ思いで地上に降り立ったら、防空頭巾を被った看護婦さんからあわただしく呼びとめられた。「学生さん、精神科の患者がいなくなったので捜して下さい」今度は真暗な医学部構内を隅なく走り回されたあげく、我がLongest Dayはシラジラと明けることとなった。

当時、私は三苦の農家住まいなので、そちらはまずは安心。友人の薬院の下宿が気になったので消息を訪ねるつもりで千代町まで出て来たら、覚悟はしていたがまさに茫然。北には海が見えるし、西は岩田屋まで何物も無くなっている。まだ木がくすぶり、焼けただれた死体が見られた。土井町の角まで歩いてきたところで陽がのぼった。その日も大変暑い日であった。

（私が佇んで陽を仰いだ十五銀行の地下室には、まだ70人の焼死体があったことを後日知った。）天神までは出てみたが、暑さと凄惨さに参って、また医学部までとっかえした。そんな時になんて思ったのか、二外科の臨床講義を思い出して行ってみたら、廊下まで火傷の患者で溢れ、ひどい呻き声が充満していた。学生と言えば、これまた超マジメのH君（個人）しかなくて、早速、慌ただしげに走り回っていた若い医局員にとっかえした。ヤケドの手当の手伝いかと張り切ってついて行ったら、死体を病理学教室の裏にあった火葬場まで運べという。担架を渡され、ずらりと廊下にならんだ死体に肝をつぶしたが、これも医学を志した者の定めと心得て、作業をはじめた。しかし、剣道やボートでいささか鍛えられていた私とちがって、H君はやや蒲柳の質、いや増す暑さと前夜からの寝不足と食抜きにバテ気味。7～8人運んだであろうか、後ろの担ぎ手の方が持ち上がらなくなってしまった。「もう止めようか」「うん、

そうしよう」と担架を玄関の壁にこっそり立てかけておいて、脱兎のごとく裏門から帰ってしまった。

運転をストップしたままの湾岸鉄道（今の宮地嶽線）のレールの上を独り歩きながら、澄んだ空の青、瑞々しい松の緑とともに生命の明るさが身にしみて、あれほど陰惨なものを見た後には、不謹慎なほど足取り軽やかに帰っていったのを覚えている。まだ19才の幼さの故だったのだろうか。